# 令和６年度　伊那市立伊那中学校評価表

学校関係者評価；（A：十分達成された　B：ほぼ達成された　C：不十分であった）　自己（項目間相対を加味した到達度）評価（a：十分達成された　b：ほぼ達成された　c：不十分であった）

| 学校教育目標 | 重点目標（中長期的目標） |
|---|---|
| 志を持て　勉強せよ　親切に<br><br>(1) めざす生徒像<br>○ 夢や目標に向かい、主体的に行動できる生徒<br>○ 自主的・主体的に学び、学力を伸ばす生徒<br>○ 人やものの“いのち”を大切にする生徒<br><br>(2) 望む教師像<br>○心身ともに明るく健康で、情熱と使命感に燃える教師<br>○ 自己課題を持ち、生徒・同僚・地域・保護者から謙虚に学ぶ教師<br>○ 豊かな人間性と広い教養、高い専門性を磨く教師 | 向学の気風あふれる学校づくり |
| | **今年度の重点目標** |
| | （１）主体的に学ぶ生徒の育成 |
| | （２）探究学習の推進 |
| | （３）「教師の枠」を問う学校づくり |

## 総合評価

○学校自己評価アンケートで「自分にはよいところがあると思う」に「あてはまる」と回答した生徒は全体で８４．２％（昨年度比０．２減）、また、９１．２％（昨年度比１．９増）の生徒が「先生はあなたのよいところを認めてくれている」と感じている。同様の質問項目について、全ての保護者と職員が肯定的な回答をしている。校長が示す「プラスワン」で生徒が自身の取組を評価し、自身の成長と自律を伸長させてきている。また各職員が生徒の長所やよさを建設的に評価したり、生徒を信頼して活動の計画や実施を委ねたりする姿勢が結果に表れている。
○自ら求めて学ぶ生徒へと変容していくために、長期休業中に自分の興味関心を生かし、やってみたいことに取り組む探究学習「伊那中マイチャレンジ」を拡充。個々の探究について意見交換する活動を取り入れ、探究活動を教科学習へも反映し始めた。学校自己評価アンケートで「自分で考えて行動する力が育っていると思う」に「あてはまる」と回答した保護者は全体で８５．７％（昨年度比３．３増）であった。また生徒の実態に応じた学習の方法や内容、時間や場所を限定しないなど、多様な学び方を保障し、個別最適と協働的な学びを踏まえ授業のあり方を見直してきた。

| 成果と課題 | 評価 | 改善策・向上策 |
|---|---|---|
| (1)小学校で総合学習・総合活動や自然の中での体験的な学びを積み重ねてきた生徒の育ちをよさとして位置付け、生徒の持っている好奇心・探究心を生かすよう取り組んだ。また、自分自身で学習を振り返り、自身の学びの設計を進めた。発想や考え方を大切にし、活動の成果を認めその生徒の自信につながる取組を進めた。 | A<br>a | ○生徒の主体的で自立的な学びを促すため、教科学習やマイチャレンジについて生徒自身による「学びの設計」を進める。マネジメントタイムでは、生徒自身が見通しを持てるよう、教師の支援の在り方についても引き続き模索していく。 |
| (2)「伊那中マイチャレンジ」では、生徒自らが「問い」を設定し探究的に学ぶことができるよう、学級学年の枠を超えたグループ「ルーム」を新設し、全職員が学びの伴走者となり探究学習への手応えを得た。また職員も探究に対する新たな課題が生まれてきている。 | A<br>a | ○「伊那中マイチャレンジ」では、個々の課題設定や生徒同士の意見交換の進め方について教師が様々な提案をしてきた。今後さらに柔軟な考えを取り入れるとともに、生徒と教師が共に考え、追究が家庭学習や次の授業につながるよう取り組んでいく。 |
| (3)「当たり前」を問う学校づくりを継続し、進めた。多様性を意識し学校生活では、常に目的を意識し、手段に囚われない活動を位置付けたり、会議を精選し、職員の自主的な取組を保障したりした。 | B<br>b | ○生徒に対する教師の願いを持ち、教師の考える当たり前が本当に、生徒に必要なのかを教師自身が問い続ける姿勢をもち、本来の目的は何かを意識していきたい。 |

| 領域 | 対象 | 評価項目 | 評価の観点 | 成果と課題 | 評価 | 改善策・向上策 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 教育活動 | 教育課程 | ○生活と学習を切り離さない学校づくり | ○生徒の生活の場に、思考力・判断力・表現力を育成する場面が保障されているか | ○日常的に生徒自身が選択し調整できる自由度が保てるように考慮し、教師の指示を減らせるように取り組んだ。制服とジャージの着用場面では一律に制限することなく、天候や気温などの状況を判断し、生徒が主体的に着こなしを考え、判断していくことで、応用力を働かせながら自分で生活をつくる経験を積んだ。 | B<br>b | ○学校づくりは生徒と職員が共に進める当事者であることを意識し、きまりと言う「教師の枠」にはめないことの継続し、あくまでも放任でなく、生徒に考えさせることの目的を共有していきたい。 |
| | | ○活用の力を伸ばす学習指導の推進 | ○学習指導要領に示された学力観に基づいて、授業やテスト改善が進められているか | ○知識注入型の学習から脱却し、思考力・判断力・表現力を問う定期テストへの転換を図ってきている。定期テストだけでなく、日頃の学習の取組からも評価の蓄積を続けている。教科書や資料の持ち込み可能なテストなどへの意識改革は滞っている。 | B<br>b | ○授業では、問題発見・解決能力の向上、多様な他者と協働的に追究する力を伸ばしせるように、授業の構造、内容や方法について研鑽を積むことを継続していく。また、それをどう評価していくかを検討し、全教科・領域で実践していく。 |
| | 学習指導 | ○個の多様性を生かした授業改善 | ○「子どもたちはどう学ぶか」という生徒の視点で授業を進めたり、ふり返ったりできているか | ○隔週水曜日の職員会議は内容の精選、時間短縮を図った。また、水曜日以外の定例会議は廃止し、職員自身のマネジメントとして必要な会議を設定した。その結果、職員は時間や場所にとらわれず、生徒の姿を語り合い、教科を越えて授業に向けた情報交換を行っていた。 | A<br>a | ○職員室が教科や学年、年齢の枠を越えた会話の中で、生徒の様子が語られ、その会話から明日の授業内容や方法のヒントが得られるような空間づくり、自由に使える時間を創出していく。 |
| | | ○「主体的・対話的で深い学び」を柱とした学習 | ○自由度を保障し、生徒一人ひとりの考えが生きる授業ができているか | ○探究学習「伊那中マイチャレンジ」が定着し、日常の授業における探究学習の展開を研究し、模索し始めた。特に、授業での終末において、次時に向けた生徒一人ひとりに新たな「問い」が生まれる授業の実現について、課題意識が生まれた。 | B<br>b | ○思考力・判断力・表現力の強化を意識し、伝え合う活動を位置付けた探究型の授業が展開されるように改善を図る。授業を見合う機会など職員研修で研鑽するとともに生徒の意識改革も進める。 |
| | 部活動 | ○主体的に部活動に取り組む生徒の育成 | ○生徒たちの自主的な活動により、心身の鍛練ができ、個性の伸長がなされたか | ○主体性をもって自分たちで考えて動こうとする個や集団づくりを目指しているため、少ない顧問の指示でも自主的に活動できる。ただし、依然として結果至上主義から脱却できない現状は課題でもある。 | A<br>a | ○中学時代に取り組んだ部活動が、今後の生活の自信や糧になったり、将来のよい思い出になったりする活動にする。再度、中学生時期における部活動について、本来の目的を教職員で確認していきたい。 |
| | | ○効率よく活動する部活動運営 | ○限られた時間の中で、部員にとって意味のある部活動が実施されたか | ○県の指針に則り、1日2時間以内の活動、平日1日は休養日を設けるなどの運営をしてきた。限られた時間の中で、効率のよい練習を計画的に進め、バランスよい生活を送れている。部活動地域移行や生徒数減少の状況で、今後の運営方法が課題となっている。 | B<br>b | ○令和9年度からの休日部活の地域移行について伊那市教育委員会から示される部活動指針に則って運営していく。また、校内における部活動指導体制について、市教育委員会からの指示の仰ぎながら、引き続き健全な部活動運営に努めていく。 |
| | 生徒指導 | ○どの生徒にも居場所があり、個が尊重される学校 | ○生徒一人ひとりに応じた学習環境や学習方法が保障されているか | ○教室に入りにくい生徒などには、寺子屋などのスペースを「多様な学びの場」として提供し、個々の対応をしてきた。中間教室や認定フリースクールとの連携や外部ボランティアの方々の協力を得ながら、個々の生徒の実態に応じた居場所をつくってきた。 | A<br>a | ○不登校の生徒が自ら学びの場を選択できるように、設定可能な学習環境を提案していく。固定概念にとらわれずに個々の生徒や家庭状況に応じて様々な学びの場を工夫し、継続し取り組んでいく。 |
| | | ○見通しの可視化と各方面と連携した生徒指導 | ○支援の方向性が明確化され、家庭、医療や福祉、行政と連携した生徒指導ができているか | ○支援が必要な生徒に関するアセスメントシートを作成、活用。支援の状況などの具体を一覧にして、情報共有、諸機関との連携と専門性を生かした助言や協力を得られた。支援する生徒数が増加していることもあり、事前対策とその後の対応を迅速に進めていくことも課題。 | A<br>a | ○アセスメントシートの活用を、担任の他多くの職員で共有し、対応の方法などを確認した上で、家庭、行政や福祉、医療などの連携を進めていく。また校内支援委員会をより機能させ、多くの関係者で当該生徒や保護者に関われる体制を構築していく。 |
| 学校運営 | 安全 | ○校内や通学路の安全の確保<br>○自然災害等への迅速な対応 | ○校内や通学路の危険や改善箇所の把握を行ったか<br>○自然災害や獣の対応など適切に行ったか | ○生徒や保護者、職員から寄せられる情報や、校内巡視によって把握した箇所について速やかに関係機関へ連絡。また、日没や気象情報などにも注視し、登下校などの見通しをもった対応をした。10月の避難訓練では、地域における中学生の役割の自覚化を目的として、保育園との共同訓練を実施した。 | A<br>a | ○災害や非常時は当然のこと、平時から地域とのコミュニケーションに努める。学校を開放して地域の皆様が来校できる環境づくり、来校した際は住民と管理職が対話し、学校や地域の状況を共有する姿勢を継続していきたい。 |
| | | ○情報社会に生きる生徒の安全指導 | ○情報化の中で被害に遭わない対処の仕方を身に付けたり、他人の権利を侵したりしない生徒の育成ができたか。 | ○SNSの危険性について全校生徒に向けた講習会を実施。家庭での見守りを期待して、保護者への啓発を行った。また、「命の学習」をカリキュラム化。学年の計画に即して、年間を通して、自らの命を考え、守る教育に力を注いだ。 | B<br>b | ○情報機器やアプリ利用は加速していく中で、安全性の確保はしつつ、その利便性を活かしながら、積極的に新たな活用を模索していく。また、ルールに則った正しい使い方について啓発していく。 |
| | 地域との連携 | ○家庭や地域との意思疎通 | ○学校でのようすを情報発信できたか<br>○生徒個々のようすについて、家庭との間で情報共有や指導方法の方針について共有したか | ○年4回の授業参観や部活動参観、学年学級通信を中心に活動の様子を発信し、保護者から本校の取組への共感の声をいただいた。<br>○複数日の参観週間や伊那中公開を多くの地域の方に案内し、自由に参観いただく機会をつくるように努めた。校長室も開放して地域の声が直接届くよう工夫した。 | B<br>b | ○時間や場所を問わずに、情報発信ができるツールとしてホームページ、オクレンジャーを使った広報活動に活用していく。<br>○保護者や地域住民が学校に来ることができる機会となるよう、企画段階から工夫する。また、申し出があれば可能な限り公開し、学校運営についても意見をいただく。 |
| | | ○学習を学校や教室にとどめない | ○地域の素材を活かした教材、保護者、地域の方に参画していただく授業や活動をすることができたか。 | ○上伊那めぐり(1学年)、5日間に及ぶ職業体験学習(2学年)、高校の先輩・先生方と語る会(3学年)、地域の人々との交流(特支学級)等、地域住民に参画していただき、活動のねらいを共有しながら実施した。文化祭では、地域の皆さん、保護者、高校生等を講師に20講座の探究の時間(マインクエスト)を実施し、専門的な取組に触れることで、刺激を受け探究に対する姿勢や学び方を高めた。 | A<br>a | ○引き続き、地域資源を最大限活用した総合的な学習の時間や教科学習、地域を舞台にしたプロジェクト学習を進めていきたい。また教員が地域を知り、地域の声や思いを聞くような交流をすることが、学習活動の可能性を広げ、生徒のための学習になるといった感覚を養っていく。 |

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 研修 | ○学習指導要領に示された学力観に基づいた学習指導の実際 | ○主体的・対話的で深い学びにつながるような授業観の転換ができたか | ○伊那中マイチャレンジと教科学習との往還について研究しながら、生徒一人ひとりのよさをどのように、授業のあり方を学び合うグループ研究や、1月実施の伊那中学校自主公開授業などを通して、教師自身の今までの学力観・教育観を問い返す取組を行った。 | B<br>b | ○職員同士が、教科や学年、経験や年齢などに囚われず、生徒の視点で授業を考えたりふり返ったりしていくことを大切にしていく。授業やテストについて従来の形を新たな考えをとりいれ変化させることを恐れずに取り組んでいきたい。 |
| | | ○地域に学び、社会性を身に着ける教師 | ○地域の方に学ぼうとし、子ども人権に配慮した接し方が身に付いているか。 | ○全職員が日常的に電話当番を行い、外部や地域の方からの電話応対を体験。また、10月には、保育園のクリスマス会に20代職員が参加し、園児と接し、社会的有用感を醸成。バランスのとれた人間性の育成を図ると共に、子どもの人権について学ぶ機会として設定した。 | A<br>a | ○職員がPTAや地域の方々と関わる機会が少ないこともあり、電話当番や保育園との交流等の活動を継続するとともに、PTA活動や自身の居住する地域での活動にも積極的に関われるように促していく。 |